

سوクソク

さわさわ 3号



重信房子さんを支える会(関西)会報

【さわ】…「共に」「一緒に」を意味するアラビア語です。“さわ”一語でその意味がありますが、“さわさわ”と続けて言う言い方もよくされるそうです。音感が良いことから会報タイトルには“さわさわ”をいただくことにしました。

追悼 ハバシュ議長

1月26日、PFLPの創設者であったハバシュ議長が、ヨルダン・アンマンの病院で、なくなられました。82才でした。

ジョルジュ・ハバシュ議長は、パレスチナ解放運動のリーダーのみならず、アラブの、そして、世界の革命運動にも、大きな影響を与えた国際主義者でした。反植民地解放闘争に一生を捧げ、常に民衆の側にたった解放と革命を模索した革命家でした。ここに連帯と哀悼を捧げます。

又、3月30日は「パレスチナの土地の日」です。1976年、イスラエルの土地収用強奪に抗議し、殺された農民たちの意思をついで、この日、占領されたパレスチナの領土の返還と、又新たな強奪に対して闘う記念の日として、歴史に刻まれています。この3月30日の「パレスチナの土地の日」のパレスチナ民衆の闘いに連帯します。

そして、今年2008年は、1948年5月14日、パレスチナの地に「イスラエル建国」が宣言されたナクバ（民族の惨劇）から60年にあたります。欧州の「ユダヤ人問題」の「解決」の名で、国際社会は一方的にパレスチナ人民に犠牲を強いてきました。すでに60年、今年こそ国際社会は、問題を正し、公正な平和を実行する義務があります。それは、イスラエルによる占領支配を終らせ、パレスチナアラブの土地の返還、東エルサレムを首都とするパレスチナ独立国家建設、そして難民の帰還の権利をみとめる公正な平和を直ちに進めることです。

パレスチナの公正な平和の実現にむけて、パレスチナ民衆の闘いに連帯します。

重信房子

「さわさわ」編集部一同



目次

追悼 ハバシュ議長 重信房子 「さわさわ」編集部一同

巻頭ご挨拶に代えて 森本忠紀

私と京都大阪物語3 重信房子

晩秋墓参…高瀬泰司の『亡霊たち』 千田智之

パレスチナと世界の現在(1) 重信メイ インタビュー

短歌で遊ぼう

核と人類は共存できない 米澤鐵志

私とピカドン 田川晴信

塀を越えて 贈ります この一曲

～春の雲さわさわ行こう仲間たち～

巻頭ご挨拶に代えて

○支えられ記<一枚の写真>

重信房子さんを支える会をはじめから、多くの人たちに支えられるようになりました。まずもって、当の重信房子さんから一番支えられています。そして何よりありがたいのは、年会費を納めてくださる会員の方が、次々と増えているということです。現在、95名ですので、この、「さわさわ」3号が皆



様のお手元に届く頃には、きっと、100名を突破していることでしょう。今回は、そういう会員さんの中からお二人の会員さん、茨木さん、住吉さん（いずれも仮名）を紹介したいと思います。

私の手元に、一枚の写真があります。先日（2月10日）、私の地元、大和高田市で、市の祭りがあり、その時に撮ったものです。写っているのは、私の二人の娘と、茨木さん、住吉さんです。茨木さんは、「さわさわ」ができる前からの重信さんのお友達で、重信さんからいただく手紙に何度もお名前が出て、大阪に住まれていることでもあり、ぜひとも、交流を薦められていた方です。去年の10・21円山でお目にかかりましたが、その同じ頃に地元、大和高田の人形作家、左向三世子さんの作品展を私が呼びかけて催したときに一度お誘いしたのですが、その時は都合が悪く、今回が初めての大和高田来訪となりました。住吉さんは、茨木さんのお友達で、茨木さんの紹介で「さわさわ」の会員となってくださっていますが、茨木さんと一緒に来てくださることになりました。私は90歳と88歳の両親と同居して在宅介護の任があるので外出が難しいのですが、こうして私どもの方に来てくだされば、介護しながらも私は交流を楽しむことができるのではないかと考えたのでした。私は嬉しくて、朝早くから、巻き寿司を巻いて、お二人を待ちました。祭りと言えば、母親は昔からよく巻き寿司を巻いたものです。

私は子供の頃からお祭り大好き人間で、御坊祭りにも、毎年、三線片手に、賑やかにまわりますが、この御坊祭りの特徴は、町内ごとに、腕によりをかけての、おでん、焼き芋、うどんを初め、各種食べ物の模擬店、堺港から直送の新鮮魚貝とれびち市、市民参加の時代パレード、プロ、アマチュアのパフォーマンスステージ、市立高田商高の全校挙げての参加、等等、手作り感一杯の祭りで、大勢の人が繰り出して賑わいますが、こちらも、今年はお客さんが来てくださって、お祭りムードは最高、二人の娘も、一層はしゃいだり、お世話になったりと大喜びで、一方、私たちも、初交流の固さもなく、お互いリラックスして楽しめたと思います。お二人とも、丁寧に礼状をくださいましたが、茨木さんは短歌を添えてくださったので、すっぱ抜いて、下に披露いたします。

かんぴょうまで入った巻き寿司あうれし大和高田のまつり忘れじ



忘れられないのは私の方です。何より嬉しかったのは、見も知らない大和高田のような場所へ、私の誘いに応じてよく来てくださったなあということで、高校生のころの、初デートくらいに感激しておりました。

客を待ち足音すれば振り返る庭に群れ咲く黄色き水仙

今回の交流は、仲介の重信さんあってこそのもので。そして、なおそれ以上に、重信さんの仲介を経ることで、何か豊かにしてもらっている、そんな気がしてなりません。重信さんからもこんな手紙が届きました。

今日、茨木さんからの手紙が届き、その中で、「森本さんから先週伺った時の写真も送っていただき、それが又、よく撮れていて、誰もが、心から笑っているんですよ！」とありました。

この一言で、あの写真がいつべんに忘れられないものになりました。何倍も印象深い写真になりました。ここには、写真を出すことは控えます。代わりに私の連れ合いに頼んで、似顔絵風の絵を描いてもらいました。表紙の絵がそれです。顔はあまり似てなくていいよと言ったのですが、そこは似顔絵師、よく特徴が捉えられています。

重信さんと、「さわさわ」の仲間があることは、私にとって大きな支えです。重信さんを支えるということ、支えるという言葉、表面的に捉えると、自分が何か支払うかのような感じがしますが、実は、反対に一杯貰っています。支えるということは、支えられるということなんだと知ったのは私の大きな驚きでありました。このような会員相互の交流は、もっともっと深まるでしょう。「さわさわ」の仲間はもっともっと増えるでしょう。そして重信さんを取り戻そうという私たちの願いが大きな力を獲得して、奔流のように、この日本社会に溢れ出すことを私は夢見ています。（森本忠紀）



私の京都・大阪物語（3）

重信房子

<69年赤軍派結成と登場>

別党へ、共産同赤軍派結成集会は、1969年8月下旬、城ヶ島ユースホステルで行われました。赤軍派は、この非公然の結成によって、共産主義者同盟への再合流をめざしつつ、ブントの一分派として独自の組織として出発しました。そして9月4日、滝野川公会堂に300人以上を集めて初めての政治集会を開催し、公然と登場しました。そして翌日の9月5日、日比谷野音では、全国全共闘連合結成大会が2万6000人を集めて行われていました。その、全国全共闘結成大会に赤軍派は、初めて、部隊として登場しました。その時のことが、こう記されています。

「その一団は、会場最前列に向かった。一列縦隊、一メートル間隔、全員赤い布をつけた青竹を手に、約40名の赤ヘル部隊の入場が始まったのである。その直後、白抜き文字が「赤軍」とわかるや、会場のあちこちから、期せずして拍手がわき起こった。このように赤軍派のデビューは劇的であった。当日の光景が物語るように、赤軍派の登場に対しては、党派を超えて、ある種の期待感が寄せられており、その期待感を担った赤軍派が全国全共闘連合結成大会という歴史的な舞台で、初めて、大衆的なデビューを勝ち取ったことは、エピソード的である以上に、政治的意味を持っていた。」（「クロニクル60年代」インパクション1980年より）こうして学生層のシンパシーに支えられて初登場しました。

同志社を中心とした仲間らで機関紙局が作られ、Nさんらが財源を工面しながら、「赤軍1号」の新聞を、9月4日の政治集会、この、日比谷野音の集いに間に合わせました。私は、9月4日には、政治集会の会場を借りた名義人として、後に逮捕されましたが当日は、会場受付や、新聞を売っていました。この、9月5日、日比谷野音に、「赤軍1号」の新聞を売りに現れた私は、その会場の雰囲気、呆気に取られていました。登場した、

少数の、赤ヘル・竹竿の赤軍派に、好意的だったばかりか、何を考えているのか知りたいと、人々は、この、「赤軍1号」を買いに、どっと押し寄せて来ました。100円玉など硬貨を置いて、奪い合うように、みんなが新聞を購入しようと大混乱でした。私が売り歩く以前に、次から次から、手が伸びてきました。

あの日、硬貨の重さに耐え切れず、2回も、公園のすぐ外の銀行に行つて、札束に換えてもらったのを覚えています。新聞は、ありっけ運んできて飛ぶように売れて、カンパも合わせて相当な額になりました。「頑張れよ!」とか「赤軍に入るのはどうしたらいいの?」などと声をかけられました。「7・6事件」の苦勞の時を経て、「やっぱり闘いこそ人々が待っている!」と、駆り立てられるような気分の初登場でした。

運動的には、全国全共闘結成の、この、9・5集会がピークで、後は、個別撃破されながら、闘いを先鋭化せざるを得ない局面に至って行きます。そのピークとして、69年秋の、全国全共闘9月5日の集いは意義深いものがありました

その後、赤軍派は、「武装闘争」を挑みます。ちょうど、69年、バリケード封鎖で闘っていた京大に、9月20日から22日にかけて、初めて、機動隊導入が、なされました。この時の、京大時計台死守闘争に呼応したように、赤軍派は、秋の前段階蜂起の前哨戦を闘っていきました。百万遍あたりでの火炎瓶、市街戦は、京都パルチザンの、ノンセクトラジカルの人々が、赤軍派の、交番、警察への攻撃と、連動していきました。

一方、権力側の準備は過剰でした。東富士演習場で、自衛隊が、10月初旬、治安出動訓練を実施しました。そして、ヘルメットの「仮想暴徒」を戦車で制圧する訓練を行っています。そのころ、10月10日には、安保粉碎、佐藤訪米阻止統一集会が、10万人を集めて明治公園で開かれています。新宿西口のフォークゲリラまで、機動隊による規制が行われ、文化活動も激突するような、騒然とした時代でした。一年後の三島由紀夫の決起は、こうした全共闘運動や、反戦行動の激化から影響を受けています。10・21に、初めて、ピース缶爆弾が使用され、爆弾闘争が火炎瓶闘争

と連動するようになりました。この、69年の、10・21国際反戦デーには、1500人を越える逮捕者を出しています。

大衆的な、10・21新宿騒動決起に見られたエネルギーは、ベ平連、反戦青年委員会、全学連など、熱い空気を示すものでした。当時、日本共産党は「民主連合政権構想」を打ち出していました。当時の新左翼運動は、すべての闘いを選挙の一票に還元していく日共のあり方に反対していました。私たちも、「それでは世の中は変わらない」と、合法的な政権獲得にはめくれず、革命に向けて、ラジカルな行動に活路を求めようとしていました。

このようにラジカルさのみに闘い方を求めたあやまりは、ありました。でも、時代は「正義の実践の為に」とさけてとれない勢いの中がありました。それは、大学でのバリケード封鎖の敗北や、全国全共闘の大儀ある憤怒を背景にして、運動的に権力に立ち向かっていく姿として、共感を得ていました。しかし、それは社会的には限られた学生層の行動の枠を出ていません。運動の担い手たちも社会経験のない未熟さ故に、「敵との攻防」の運動戦を丸裸で、全力を傾けて闘い、解体していくことになりました。その中で、この69年は、最も激動していた年です

<69年蜂起の秋>

前述のように、69年秋から、赤軍派は、武装闘争を開始しました。しかし闘い方は稚拙でした。闘う前から機関紙に「東京戦争」「大阪戦争」を宣言して公安の警戒が、重包囲を作り出していました。茨城大、福島医大など、10・21に向けた武器が準備されるはずの計画が綻び、上野や水戸で事前に逮捕されました。「東京戦争」も「大阪戦争」も予定通りには行われなかったようです。こうした中で、10・21前に、Dさんら、人民組織委員会主要メンバーは、逮捕されていました。そして、10・21当日には、「新宿戦争」も淀橋署攻撃にピース缶爆弾の不発など、「戦果」はあげられませんでした。

さらに、11月4日、大菩薩峠で合宿中の赤軍派メンバー53名が急襲逮捕され、「秋の蜂起計画」は挫折していきました。「赤軍派の時代」とい



うのは、69年の9月4日の登場から、よど号ハイジャック後までの70～71年くらいの短い期間でした。この大菩薩峠事件の時、私は、「暁の急襲」を受けた「福ちゃん荘」という山荘のUさん、Yさんと連絡するため、知人の設計事務所を借りていました。「福ちゃん荘」の電話は、ダイヤル式にもなっておらず、グルグルとハンドルを回して申し込んで掛けるとかで、山荘から電話をすれば、こちらの場所は明らかになってしまいます。リーダー達は、手配もされており、他の安全な場所において、私のいる中継場所を通して、暗号で指示をしたり、報告を受けていたわけです。

「暁の急襲」の前夜、私たちはこの中継場所で、救援の会議をやっていました。東大闘争で保釈中の、同志社のSさんが、当時、救援を担当していて、「大菩薩峠にいる連中が、これから何をするのかはわからないけれど逮捕時の心得だけは、きちんと伝えた方がいいんじゃないか。」と提案しました。私とSさん、Kさん、小西さんの4人で、炬燵に足をを入れて話していました。そして、Sさんが、明日朝、大菩薩峠の山荘に行って、逮捕時の心得をみんなに伝えようと決めました。そこに、リーダーの一人から電話が入ったので、その旨を告げると、「全員突っ込むのに何が救援か。そんなの必要ない。」とのこと。私たちは、それでもやっぱりSさんを送ることにしました。朝一番の、新宿発に乗れるように、徹夜会議のまま、Sさんを送り出し、残りの3人で、ウトウトしていると、電話がなりました。受話器を取ると、今さっき出て行ったSさんです。「今、新宿に着いたけど、もうその必要はなくなったよ…。TV付けてみてよ。」と言うのです。あわててTVを付けると、逮捕、大捕り物の映像が流れていました。あわててカーテンをあけると、道を隔てたアパートの外付の階段に、鈴なりの私服公安がこちらを偵察しているところでした。

3人は、後で落ち合う方法を決め、一齐に外に出ました。すぐに、この設計事務所の主に連絡し、近々ガサ入れで迷惑をかけるだろうと謝罪し、対処してくれるように頼みました。この事務所の責任者のAさんは、広い気持ちの人で、「いいよ。逆にこうなったら、自分も、もう一度革命を目指してもいいと考えている。君たちのリーダーに会ってみよう。」と言いまし



た（69年暮か70年初め、私が逮捕、釈放の後、Aさんを銀座で我がリーダーたちと会えるように段取りをしました。数ヵ月後、Aさんは、いつのまにか、赤軍派のリーダーとして逮捕され、長期刑を受けてしまいました。部屋を借り、その後、リーダーに引き合わせたことによって、Aさんの違った人生を開いてしまいました。もちろんAさん自身の選択ではあったのですが、申し訳ない気持ちになります。）

とにかく、私自身、大菩薩峠事件とこうして関わることになりました。そしてまた、この事件によって、前段階蜂起の主力部隊を失いました。

<初逮捕>

そのすぐ後、11月11日、私も「別件逮捕」で初めて、獄中の闘いを経験しました。「9月4日の、赤軍派の集会が、公安条例による許可を受けていなかったとして、会館借用申込者を逮捕した」として、その逮捕の違法性が、「ジュリスト」などの法律専門誌で問題とされたほどでした。なぜなら当時、会館借用時、（消防か警察か忘れましたが）慣例では、届出をおこなっておらず、公安条例違反とは言えなかったし、別件逮捕だったからです。また、私自身、消防、警察への届出は必要ないのかと、区の公会堂の管理事務所に申し込みの時、問い合わせていたのです。そして、「必要ない」という、行政指導を受けていました。慣例を無視した突如の別件逮捕だったのです。この秋、69年は、10・21の国際反戦デーに引き続いて、11・17佐藤訪米阻止闘争へと連日のデモがありました。首都圏では大衆的な反対行動が連続的に計画されていました。弾圧もまた強化されていました。私を逮捕したのは、ちょうど、大菩薩事件と合わせて、「これまで見かけたことがない女性活動家が、ちょろちょろしているので、捕まえて、素性を調べよう」ということだったと、刑事自身が述べていました。

初逮捕は、赤坂の、東急ホテルの前でした。ちょうど、会議を終えて、付近のカフェに訪れた時です。既に、公安らしき人物が数人、仲間たちの周りにいました。そこには、手配されている、Yさんも来る予定だったので、私の方に尾行を引きつけようと、カフェの友人と手短かに話しました。当日に、私にも逮捕状が出たのを知りませんでした。私の方に、ぞろぞろ、

5～6人が付いて来ます。知らないビルの中に入ると、また、付いて来て、東急ホテルの前あたりで、当時、使用していた私の通称を呼びかけました。振り向くと、あつと言う間に、両手を掴まれました。ガードレールに右足を引っ掛けて、「何するんですか？痴漢はやめなさい！」と騒いで抵抗。若い女性が男に取り囲まれているので、たくさんの野次馬が、走って助けにきました。刑事はあわてて、「我々は警察だ。」と手帳をかざして、繰り返しました。「なんだい、売春か…」などと言いながら、人々は介入をやめてしまいました。争っているところを、指名手配中のYさんが、目で合図しながら去って行くのを見ました。ホッとしました。

それから、その日か、その翌日か、もう忘れましたが、警察署か、警視庁の調べ室から、菊屋橋署に留置されました。当時はデモといえば、たくさんの方が逮捕されていて、68年の10・21は、1日に1000人以上が逮捕されていました。69年に入ってから、東大闘争の、1月18、19日で、安田講堂の攻防と、御茶ノ水の市街戦と合わせて、800人くらいが逮捕されています。「大量逮捕方式」で、各大学の中堅の自治会の執行部などが、狙い撃ちされました。

資料によると、1969年には、10・21には、1500人以上が逮捕されたばかりか、私がちょうど逮捕された12日以降の、佐藤訪米阻止闘争、11・13新宿などでは、322人、羽田、蒲田の11・16闘争では、1856人の逮捕、17日には300人の逮捕者を出しています。そんな時代の中での逮捕は、それほど特殊なことではありませんでした。私は若く、熱烈に革命を求めている、「逮捕、何のその」という気持ちでした。写真を撮られる時にも、「永久保存でしょ、きれいに撮ってね」などと『なまいき』でした。逮捕理由の、会場借用届出の「公安条例違反」では違反しておらず、すぐ釈放しました。そしてそのまますぐまた、別件逮捕、「4・28凶器準備幫助罪」として、ナップザックを買ったことが罪とされました。「ナップザックがなぜ凶器なのか?!」と、抗議し続けていました。その間、街頭闘争で逮捕された学生たちが、どんどん入ってきて、菊屋橋女性留置所を一杯にしました。

当時の、菊屋橋署は、東京都の、唯一の女性専用留置所があったところ
です。上野の駅に近く、戦後の売春取締りに都合の良いように定めたと、
看守が言っていました。扇型の地下留置場は、9房に仕切られていて、各
房4～5名が入れるようになっていたと思います。学生のデモ逮捕者が大
量に入ってきて、一つの房は、収容人員の倍の9～10人となり、布団も
少しずつ重ねないと敷けず、足の踏み場もない盛況となりました。若い私
たちは、房の中でお喋りや、尻取り歌合戦で盛り上がっています。誰も看
守の言うことは聞きません。時々、男の所長が朝夕の見回りに来ると、冷
やかしたり、「帰れ！」コールを浴びせていました。寒いので、当時、流行
っていた、「黒猫のタンゴ」を歌いながら、前の人の肩に手を当てて、一列
に汽車のように、スリのおばさんも加えて、狭い房内を踊りながら景気
をつけて、騒ぎ楽しんでいました。

ちょうど、11月17日、その日は、佐藤首相が、米国に発つ日でした。
その日は、デモ対策で、ヘリコプターで羽田まで移動することになったの
は、後で知りました。午後1時近く、私は呼びかけました。「みんなあーっ！
今頃、佐藤は何事もなかったように、米国へ行こうとしている！抗議のた
めにみんなでインターを歌おう！」みな「異議なし！」と各房立ち上が
りました。「シュプレヒコール！佐藤訪米を許さないぞー！」と叫び、「佐
藤訪米を許さないぞー！」と唱和して、インターを歌いました。「ああ、イ
ンターナショナル我らがもの～」歌っているうちに怒りがこみあげて、何
人も泣いていました。私も泣けてしまいました。これで目をつけられたよ
うです。私は、「取調べ」と呼ばれて、みんなのいる地階の留置場から、3
階くらいにあった独房に換えさせられてしまいました。

<獄の約束>

3階独房は、狭い空間に5～6房が仕切られていました。地階の留置雑
居房から、朝と午後インターナショナルを歌い、「インター、聞こえるか！？」
と、歌や呼び声が、かすかに届きます。こちらも声を張り上げて応答しま
す。そうしているうちに独房も一杯になりました。隣の独房は、中核派の
歌のうまい女性です。きれいな声で、いろんな歌を教えてくださいました。「も

う泣かないで坊や、あなたは強い子でしょ～」や「地の底から地の底から、
怒りが燃え上がる～」と歌唱指導やワンマンショーでお喋りしました。

そのうち独房にも入りきれずに、二人一緒に同居させるようになり、私
の房にも入ってきました。東京女子大（東女「とんじょ」と呼んでいまし
た。）の学生です。当時、救援連絡センターから、黙秘している人にも、日
用品や食料などが、番号で届くのですが、行き違いで、何も受け取れない
人がいたそうです。それで自分のものを分けて使わせたりしたことが、勝
手なことをしたという懲罰理由で、彼女は独房に移されたとのことでした。
独房も人数が増えて、声を合わせて大声で怒鳴ると、「聞こえるよー！頑張
ろうー」と返ってきます。歌を送りあったり、上の階と地階でも、大騒ぎ
の毎日でした。

私は名前が明らかな、逮捕状による逮捕だったので名前と呼ばれていま
したが、街頭デモで逮捕された人々は、名前を知られていず、互いに拘留
番号で呼び合っていました。同房の東女の彼女も、取調室に親まで来て、
名前もわかっているのですが、黙秘で頑張っていました。弾圧に対して、
お互いの経験を語り支え合いながら過ごしました。そして、出られるか、
起訴になるか、わからないけれど、もし、クリスマスイブに、お互い、獄
の外にいたら再会しよう！と独房仲間で話をしました。隣の中核派の彼女
と3人で、それじゃあクリスマスイブは、京都のリラ亭で会おうと決めま
した。今では、もう、リラ亭はどこにあったか覚えていませんが、2人に
場所を説明しました。リラ亭には、同志社の藤本さんか、Kさんが、最初
に連れて行ってくれたのだと思います。とっても小さな居酒屋です。がた
いの良いのに不似合いなほど優しい、

蝶ネクタイのマスターが、学生たちにとっても好かれていました。安く
て、狭くて、暖かく、学生たちが好き勝手に、いつも平気でいられる店で
した。リラ亭の京都を選んだのは、東女の彼女は四国の、造り酒屋の娘だ
ったし、中核派の彼女も実家は大阪の阿部野筋のあたりだったので、田舎
に近くて良いだろうと思ったためです。それに出獄したら、たぶん、その
ころには、私も京都にいただろうと思ったからです。私は彼らよりも少し

最初に逮捕されていたせいで、12月に不起訴で、他の人よりも早く釈放されました。釈放後、逮捕を新聞で知った中学校の教育実習の教生の時に教えた時の生徒たちから連絡が入りました。既に高校一年の彼らは、菊屋橋署の前まで来たり、明治の学館を訪ねたり、ずいぶん心配し、何とかしようとして子供心に考えていたことを知り、胸が熱くなりました。

それからしばらくして、ちょうど、クリスマスイブの日、私は京都のリラ亭に、同志社の友人たちといました。「メリークリスマス！」と、リラ亭の狭い止まり木の椅子に座って、みんなでワイワイと飲んでいました。ドアが引かれて、おそろおそろという感じで、東女の彼女が顔を出しました。うわー！嬉しい！会えたね！抱き合って喜びました。彼女は、「でも、中核派の彼女は起訴になってしまったの…」と言いました。中核派のAさんは、当時、中核派に対して持っていた、疑問や悩みを語っていました。「もし起訴になったら、統一公判で、みんなと一緒にやりたくない…」と言ってました。私は助言する術もなく、「あなたらしく生きてね！」と励まして、別れたままです。（後に、獄を出て、Aさんは私に会いに訪ねて来てくれましたが、会えずに私は、アラブへ行ってしまいました。）ひとしきり、その後の獄の様子を語り合い、本当のクリスマスプレゼントの出会いね！と、嬉しい夜を共に飲み明かしました。「メリークリスマス！彼女の分まで乾杯！」

事情を知ったマスターが、お酒とつけたしに、何か奢ってくれたのに、その味が思い出せません。同志社の友人たちも、数日後には四国に帰郷する彼女を、みんなで乾杯して祝し、出獄祝いのクリスマスイブを過ごしました。当時、私はKさんらの紹介で、銀閣寺そばの下宿に出入りしていました。そこの主のS君の下宿を勝手に根城にしていました。S君は、「赤軍派にはよういかん」と、7・6事件以降の学生運動に、見切りをつけながら、何をしたらいいのかと悩んでいる風でした。誠実で、人柄も好感の持てる友人です。京都に行くと、いつ行っても、炬燵に足を突っ込んでリラックスできる場でした。彼女と一緒に、S君の所に行きました。東女の彼女は、性格も良いし、明るく、すてきな、女性です。彼女が田舎に帰る前に、京都見物につきあってほしいと、S君に頼みました。S君なら誠実に、

きつと、その願いを引き受けてくれると思ったからです。それで、私は東京に戻り、S君に任せました新年過ぎて、次に京都に行った時に、予定では帰ったはずの彼女は、しばらく京都にいて、その後、S君と恋人同士になったのを知りました。私にとっては、とつても嬉しいできごとでした。その後のことは、私はアラブに行ってしまうってわかりません。

初逮捕は、私にはブレーキではなく、アクセルとなりました。去年6月から、接見禁止が解けて、35年以上前の、大学時代、ブント、赤軍派時代の友人と会う機会もあります。そんな思いも寄らぬ再会は、嬉しく、励まされるものです。大学時代の多くの友人たちが、あの9・5日比谷野音の集会の後、赤軍派のやり方に疑問を持ち始め、やめていったと話をしてくれました。私は反対だったな…と思いました。当時の私は、みんなの持っていたラジカルな正義感や情熱をもって闘っていた学生たちと同じにすぎませんでした。けれども初の逮捕は、踏みとどまって考えるよりも、権力の横暴への怒りが勝り、更に闘いへとアクセルを踏んだのがわかります。その時のごうまんな“使命感”や、自己肯定した闘いの未熟さは、アラブに行つて、失敗したり敗北したりする中で、学び、とらえ返したものです。

過ぎたるは及ばざりしか冬薔薇

花の重さに耐えずうつむく

千田 智之

昨秋、素行も由緒もさして真っ当とは言い難い中高年8人が連れ立って高瀬泰司の墓参に出掛けた。これは高瀬の名を些かでも知らない人にとっては実にどうでもいい話しではある。例年ならば紅葉の盛りの時期なのだが、この年はいつまでも暖かく、11月の末も近いというのにまだ紅葉が始まったばかりだった。信じられないくらいの晴天で陽射しがかえって辛いくらいだ。

高瀬の墓は、京都吉田山の中腹南西斜面に広がる吉田神葬墓地の上段西北端にあり、さらに二列ほど上には、石川九楊が発起した八木俊樹の記念碑が設えられている。京大11月祭（今や“NF”と呼ばれている!?)で賑わう大学正門前に集まった我々は、初老の身には堪える坂道を上がり、墓地の裏門から入った。未だこれしきの坂で膝が笑ったり、息が上がるように思うのはおかしい話なのだが、何十年も前になる若いときには、日夜幾度と教えられないくらい平気で上がり降りしていたという《記憶》が現し身を苛むのだろう。実際に堪えたわけではない。記憶と現しの落差が堪えるのである。

墓参は墓参であって、特筆すべきような目的はない。ある者はとにかく初めて訪れることそのことや、或いは、他の者にとっては墓前で腕をあげた三線を弾き『涙そうそう』を謳うということが目的だったのかも知れない。実際に我々はそうした。いかにも喪の仕事のように、墓の前で合掌し、墓石にワインやウィスキーを振りかけた。そんなことが今は亡き高瀬を慰めるものではないことは重々承知していても、だ。しかし、デリダによると、「たぶん、あらゆる喪の仕事の中には隠喩化の過程があろう——圧縮ないし置き換え、内化ないし取り込み、ここからさらに、死者への同一化、再ナルシス化、理想化等々」（ジャック・デリダ『マルクスと息子たち』岩波書店刊）となる。

高瀬泰司とは何の隠喩であり得るのだろうか。高瀬という「隠喩」は成立するか。若くて元気なときは言うまでもなく、車椅子に頼る生活をするようになって、高瀬は「存在そのものがメッセージ」であって、決してメタファーではなかった。死んだら隠喩と成る条件は何か。もっとも、来歴も現在の生活スタイルも全く異なる8人の墓参者を呼び寄せて繋いだのは、《隠喩としての高瀬》に他ならないのであるが。

だが、墓石は隠喩ではなく、記憶を刻んでいる。久しぶりに訪れた私自身が、彼が亡くなって既にちょうど20年経っていたことに不意に気付かされた。1987年3月に彼は死んだ。毎年指折り数えていたわけではない。「菜の花忌」と名づけて賑やかで風変わりな13回忌をしてからというもの、とんと墓参りもしていなかったのだ。

だから、彼がいなくなってからの20年とその前の20年とはいったい何なのだろうと思わずにはいられない。その20年前とはつまり、1967年に当たる。

高瀬泰司とは、たとえ酒の席でも思い出話を語りあうようなことはなかった。6年も私の方が若かったし、また多分、そういうことを好まない人であったのだろう。だが、その年の11月の羽田闘争（10・8ではなく、11・13の第2次羽田闘争）に行ったことを珍しく彼から随分前に聞いた記憶が甦った。既に、学生運動の第一線から身を退いて数年も経っていたというのに、第1次の羽田で山崎博昭君が亡くなったことを知り、矢も楯もたまたらずに、後輩二人とどこの党派や部隊にも属さず羽田に駆け付けた……。60年安保闘争を主導した全学連の部隊が羽田空港ビルを占拠した時の、ジャンパーを着て指揮を執った唐牛健太郎の勇姿を自分が再現したかったのだと言う、思い入れたっぷりの思い出話はその時限りのことだとしても、自らの若き日、全学連のデモ隊のただの一員として憧れの眼差しを唐牛健太郎に送ったのは本当のことだろう。「唐牛さんはな、本当に格好良かったんや」という彼の言葉が甦るようだ。

1960年6月の羽田と67年11月のそこをイメージの中で繋ぎ、ただただ「格好の良さ」をバネに即座に行動を起こす心性がどうしたのだと

語ることが、この文章の目的ではない。そんなことを今は解明しても始まらないのだ。それは「喪の仕事」ではないだろう。

「いよいよ、山が動くと思った」と言うのが、この数少ない思い出話の落ちだった。彼の、こうした直観——もち論、直観がいつも当たるとは限らないが、外れなかった場合は洞察と呼ばれる——には端倪すべからざるものがあつた。こうして彼自身が、何やかやの折りごとに住まいと店のある吉田山から下りて、学生たちの政治活動に関わる日が再び始まったのが、その67年11月だったと思う。時に26歳。

高瀬と私が直接に知り合ったのは69年の初夏だったから、それまでの1年半のことは何も知らない。その出会いは愉快的なものではなく、状況も決して良好ではなかったから、正確な記憶が戻らないとしても不思議ではない。何にせよ、新左翼の何処かの党派のリーダーでもなく、まして学生や院生でもない「スナックのマスター」が京大全共闘のノンセクト学生生活動家たちにアレコレと指示を出したり、意見を言う姿を異様に思った記憶だけが強く、その異形（さらに言えば異望、つまりカリスマ）とともに余りに強く残っているだけだ。

それからの数年も、また、彼が苦悩を背負って病に倒れてからのことも、そんな思い出話をここで書く気はさらさらしない。デリダの言う「隠喩化の過程」の始まりに触れてみたいのである。それがまさしく「喪の仕事」であるならば、なのだが。

高瀬と出会うまでは、全共闘の学生の活動を支えたり、助言を惜しむどころかまるで助燃剤や点火剤のように煽る——後で悔やむことのないように常に精一杯闘えという姿勢、つまりその主調は、あれこれと考え喋っている内に自ら不可能性を呼び寄せる、極めて普通の在り方の否定——「年長者」の存在を、私は知らなかった。もち論、新左翼の諸党派には「学対」なる者が居て、各大学の自派の拠点に派遣されて政治指導をしていることは知っていたし、現に何度もそう言う光景を見た憶えはあつた。そのような意味でも高瀬は決して「政治指導者」ではなかった。

今から思えば僅かな年齢差に過ぎないが、学生運動の中での「年長者」

との出会い——そのような存在に対して常に警戒心だけは持っていた——では、例えばこんな経験があつた。自らの大学での闘争の時、大学本部をバリケード封鎖していた全共闘（正確にはその準備会(?)）の単なる一員だった私が、左翼学生のボス達（どこかの政治党派の「学対」やそのリーダーだったか）に囲まれ、「こんなことをして、戦後学生運動の伝統を潰すつもりか」と非難めいた恫喝を受けた。「伝統？私たちは止むに止まれずバリケードを築いた。戦後学生運動史のために闘っているではありません」と応じたのだが、別段私は全共闘のリーダーでも代表でもない。しかし、今にして思えば、この非難は正当であつた。彼らは「左翼」として安住できる伝統と秩序の中に居たのである。学生運動でのそれなりのキャリアを積み、少数のリーダー達には、何処かの組合の専従者や政治団体の職員の間があつたのだ（もち論、全ての党派にそれが可能であつたわけではないのだが）。それを確保するためにも、人材の流れを断ち切り、破壊するような「過激な闘争」は困るのである。多分、彼らは明らかに直観したのである。「こんな闘争は壊滅的に敗北するだろう。批判勢力としての安定的な地位は大学の中ではなくなくなってしまふだろう」と。いずれも正解だった。元々、「左翼」として安住できる伝統や秩序そのものが、冷戦構造の産物であり、国内的には「55年体制」と呼ばれたものであつたのだから。だが、これを突き崩したのは残念ながら全共闘ではもち論なかつたのである。

私が出会った時には、高瀬泰司は、そんな伝統や秩序とは無縁の人であつた。壊滅しようが敗北しようが、精一杯やらなかつたことを後で悔いるより遙かに善いのだと言う、いわば、「生」の完全燃焼タイプと言えるだろう。しかも、創造的で自由な人であつたことは間違いない。しかし、それが彼にとって幸いであつたかどうかは知り得ない。

と言うのも、或いはひょっとして、ノンセクトの学生生活動家たちが高瀬に頼つたのは、「生きている者たちは、自分自身と事態を根本的に変革し、いままでになかつたものを創造する仕事に携わっているように見えるちよどそのとき、まさにそのような革命的危機の時期に、不安そうに過去の亡霊を呼び出して自分達たちの役に立てようとし、その名前、闘いの声、衣

装を借用して、これらの由緒ある衣装に身を包み、借り物の言葉で新しい世界史の場面を演じようとするのである」(カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』より)というマルクスの洞察のとおりだったのかも知れないからだ。ノンセクトの活動家たちも私も、最早後戻りできない、自らが作り出した事態とその結末に恐れを抱いていたようだ。公権力や大学当局だけでなく、あらゆる政治党派とも何らかの対峙や対処をしなくてはならなかった。そこで、高瀬泰司だ。彼は元京都府学連委員長で、60年安保闘争の後、総退却状況の中で唯一学生運動の闘いを堅持したのだ。それでいて恬淡で闊達な人だったから。

もし、今の私の推察通りだとすると、学生たちの方が狡いとも言えるだろう。「人間は亡霊的なものよりもさらに亡霊的なのだ。人間はみずから恐れとなる⇒みずからに恐れを抱かせる。彼は、みずからがもたらす恐れとなるのだ。そこから、人間主義を維持しがたいものとする数々の矛盾が生じる」(ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち』藤原書店刊)とすると、高瀬を結局は、学生たちが利用し、苦しめたことになる。

つまり、今なお生きている私が、死んだ高瀬の亡霊であるというわけだ。そして、それを私が学んだのも、高瀬の死をもってしたということになる。

何故なら、デリダに言わせると、自分から学び、自分に教えることは、「論理そのもの」が禁じていることなのだそうだ。デリダは言う、「生きることは、その定義からして、みずから学ぶこと=教えることはできない。自分で、生を通じて生から、そうしたことはできない。それができるのは、他者を通じてであり、しかも死によってである。いずれにせよ、生の縁にある他者を通じてなのだ。内側の縁なり、外側の縁にある他者を通じて。それは生と死の境の他者教育なのである」(ジャック・デリダ、前掲書)と。

泰司さん、ご免な。これで「喪の仕事」になっているか。成っていないよね。もし向こうに聞こえたなら、きっと「何を言うとするんや」と阿々大笑していることは分かっているけれど。

(2008/3/10 記)

パレスチナと世界の現在 (1)

重信メイ インタビュー

H=原啓介、M=重信メイ

H: つい先日もイスラエルがガザへの侵攻をしましたね。一体イスラエルは何をを考えて戦争を仕掛けようとしているのでしょうか?

M: 今、イスラエルがやろうとしていることは、パレスチナが2つに割れているということで、ファタハの政権をアメリカとヨーロッパを中心にして見ているんですけども、そのファタハのアッバス政権を支持している。そしてハマスの政権を認めていない、という状態の間にハマスを潰そうという方針だということですね。

H: ハマス潰しということでやっている?

M: ハマス潰し…こういう波状的な攻撃や経済封鎖をすることによって、ハマスの不人気定着するのではないかという考えでやっている。実はアメリカもこれに参加していて、アメリカの雑誌について先週発表されたんですけど、

M: その雑誌にはアメリカの政策の一つとして、ハマスを潰し…まあハマスが政権とってから、ハマスを潰すという方針になって、それが実際の政治的な意見と、そういう問題じゃなくて、実際にファタハの側に武器を提供しためして…

H: 当然裏で?

M: そう裏で。武器や経済的な援助をして、ファタハのある部隊、それはガザで秘密警察治安警察のトップをやっているファタハの部隊に力を与えて、そしてハマスとファタハの間に戦いが起こるようにする。そして武装した戦いがあって、お互いの幹部を殺しあうことによって、ハマスの人気もまたこれで国民からは落ちるんじゃないかというふうな方針をやっていたということが、つい最近アメリカの雑誌で出てきたんですね。

H: 一種の暴露ですね、暴露された。

M: 暴露されたんですね。そういう意味で、やっぱりいろんなところを見ると、イスラエルの方針を見ている、アメリカの方針を見ている、これは早いうちに多数派ハマスという政権を潰して、ファタハという政府だけで、早くこの中東問題を片付けて行

きたいということですね。なぜならファタハだといろいろ妥協してくれる政権だし、力の押しが利く…

H: アッバスがそうだという…

M: アッバスに対して力が利くからということもあると思うんですね。それっていうのは、中東を見るとときに全体像を見ないといけないと思うんだけど、やっぱりハマスに対して行われていることと、イランに対しての圧力とレバノンに対しての圧力と、これ全部つながっていると思うんですね。それプラスシリアなんだけれども。

H: イラン+シリアね。

M: イラン・シリア・レバノン。メインに言うとイランが一番のメインの目的なんだけれども、そのイランを潰す中でやっぱりレバノンにあるヒズボラや、レバノンに影響力を持っているシーア派の良いイメージを壊していく。今までは、ヒズボラというのはレバノンの中でも英雄像を謳ったのを、どんどん国民的な国民レベルですごい・・・あのもう普通の・・・何ていうんですか・・・戦っているだけの精神組織にしてしまう。開放された民主的な組織ではなくて、ただの政治党派、戦いの一つの組織になってしまう。

H: 軍事組織っていうかね。

M: 軍事組織でもあるけれども、不安定な状況を作ることによって、いろんな暗殺とか爆破があることによってどんどん、どんどんシーア派とヒズボラに対しての不信感が高まっていく。これはレバノンの中。で、パレスチナでは反ファタハ。それを潰すっていうことは、要はハマスもヒズボラもイランから援助を貰っている。そしてそれがどういう援助かというと、本当は経済的な援助であったりするんだけど、でもこれがあたかも政治的な指導を受けているというような方向へ持って行って、ひいてはイランを潰す。で、シリアもそうなんですけど、イラクに対して、きちんと治安を維持するための役割を果たしていないというようなことを言って、シリアを叩いている。で、レバノンでの治安不安定や、治安の悪化させるようなことをシリアが裏にいるっていうようなことも爆破事件とかがある度に、そう言っている。そして実は、一番このイランがいることに対して、居心地が悪いのはイスラエルなんですね。(中東の)以前はいろんな国によって、例えばイラクとか湾岸諸国もイランという存在がちよっと・・・

H: あ、まあ・・・地に落ちてたよ。

M: 落ちてたけども、今、中東を見ると湾岸諸国それぞれがイランといい国交を結ぼう

としていますし、これからいろいろと・・・

H: 政治的にも中心に成りつつあるということね。イランが。

M: そうですね。中心に成りつつあるし、それ以外経済的な面でも、もういろいろと湾岸の諸国とかでも関係を持っている。で、事実上今のイラクとイランの関係もどんどん良くなっている。それはもちろん現イラク政権がシーア派が主だということもあるけれど、そうするとせっかくイラクを潰したにも関わらず、結局はイランがそこで力を持っている。湾岸の諸国は今ではやっぱりイランとのいい関係を結ぼうとしている。影響力の範囲で言うとやっぱりレバノン、ヒズボラにも影響している。パレスチナのハマスにも影響している。やっぱり中東全体像を見ると、イランがどんどん危なくなっていく・・・というふうにアメリカとイスラエルは判断している。だから実際イランはどこにとって危険な国かっていうと、別にアラブの国からどの国から見ても、イランが危険というふうに見てはいない。唯一イランがいることが居心地悪いと思っているのは、やっぱりイスラエルなんですね。でもアメリカの外交はイスラエル・オンリーに結ばれて

いるから、中東に関しては、もう完全に、特に今の保守派なアメリカの外交はそうですから、イスラエルが居心地いい中東に作り上げる為にはやっぱりイランをどんどん攻めていこうとしている。でも攻めれば攻めるほど今のイランは影響力を持ってくるんですね。だから、多分このハマスのこともそうですけれども、こういうふうに今回もガザを完全にまた攻撃して、ライスが訪問した時だけは一応撤退して、で、また即攻撃しているけれども、そういうことをしていると、これはまた、反対の影響で本当はハマスの影響力を減らしたり、パレスチナの間を分離を深めようとして始めたことがうまくいっていない。昨日のデモなんかを見ると、もうファタハもハマスも初めて一緒にデモの中で旗が立ったり、一緒に・・・あそこまでも、武装してまで戦っていたぐらいなのに、今のヨルダン川西岸側にいるパレスチナ国民・・・団結の・・・

H: 昨日? 昨日の様子なのね?

M: 昨日と一昨日の様子なんですけど・・・一昨日か、一昨日の様子なんだけれども、



団結するデモではやっぱりハマスもファタハの人もみんな一緒になって、アッバスさんもイスラエルとの交渉をストップせざるを得ないような状況になった。というのは、アメリカがやっていることやイスラエルがやっていることは、反対方向に行っているんですね。で、これをどう進んでいくかということに関しては、多分あんまり物は変わらないと、やっぱりハマスは大きな割合のパレスチナ人の中でも大勢の人がやっぱりハマスは民主的に勝った政権なのにチャンスを与えられずに、こういう状況に追い詰められているんだって見てる人は大勢いるから、で、パレスチナ人は一応その苦しみの中に生きているから、だんだん苦しいから嫌だとかって思う人もいるかもしれないけど、アラブ世界全体で見ると、これはもう不公平な・・・

H：不公平・・・

M：(不公平な) 行動そのものなんですね。だから、そういう不公平な民主主義っていうのを中東に広げるのはどうなんだろうって思っている人はどんどん、どんどん増えてきているから、多分その攻撃をすることによってハマスが消えるかとか、レバノンに不安定を作ることによって、ヒズボラが消えるかとか言っても、それは全くないと思うんですよね。反対にこういうことすることによって治安は悪くなる、不安定な状況は作られるけれども、でもハマスという存在は多分変わらない。むしろアラブの世界ではどんどん大きくなっていく。ヒズボラという存在も多分変わらないし・・・

H：あの、ひとつ聞きたいのは、そのハマスっていうのは政党なの？日本という政党っていうか、政治党派っていうか。

M：あー、両方。政党でもありますし、軍事的な組織でもある。反対に政党どころか、もっと社会的な面でイスラエルの占領下にあるパレスチナの中ではあらゆる福祉が与えられていないんですね、パレスチナ人にとって。医療にしても学問にしても、住まいにしても何もやっぱり占領は与えてくれていない。やっけていてくれない分、いろんなイスラム諸国からのカンパを集めて学校を建てたり、モスクを建てたり、援助を配ったり、食料品を配ったりという、そういうことをしているから、政党でもありますし、社会援助的なこともしていますし、軍事的な部分も。もちろん党としては多分3つに分かれていると思うんだけど、元は政治的な党、政党ですよね。元はね。あの・・・元というのはイスラム・ブラガハルというイスラム組織、これはアラブのいろんな国にも同じようなものが存在するんだけど、大抵それは元は政治的、政党でそこから軍

事的な部門が出てきたりするという事です。

H：で、今後の見通しとしてはファタハもハマスもひよっとすると統合するというか、結構仲良くやっていくというか・・・

M：仲良くやっていくかどうかは分からないけれども、今、議論になっていて、あるいは、このガザでの緊急な状況が作られる前、あるいはファタヒスタンとハマスヒスタンというように普通に言われているんだけど、要はハマスがあるガザとファタハが権力を握るヨルダン川西岸とに別れる前にはPLOの各党、ファタハ以外の各党が、これは「PLOの改革」が大事だということはずっと言ってるんですね。この改革っていうのが何かっていうと、PLOが作られたのはずっと昔の60年代なのでハマスのジハードも含まれていない。このハマスとジハードというのは今のパレスチナの情勢の中では、かなりの割合、パレスチナ人の割合を占めているわけだから、入ってないのにパレスチナ人を代表する組織、パレスチナ人を国として代表する組織はないだろうという話で、この二つの組織を含むPLOを改革しなければいけないということになっていて、このことに関してはファタハ以外のどの組織も賛成している。ただ、その条約については・・・

H：ファタハ以外は？

M：ファタハ以外。ファタハも一応形の賛成はしているんだけど、何もしていない状態で。でも残念ながら今のPLOの一番勢力を持っているのが、ファタハだから、ファタハが動かなければ何もありません。だからそう意味で本当に多分これから私が一番どんだん方向性として動いていくと思うのは、PLO改革じゃないかなって私は思っているんですね。PLOの改革のほうに・・・

H：PLO自体の古い枠組みの政治と体制の改革ってことですね。

M：うん・・・もっと多分パレスチナの政治が、まず進んでそこからこのファタハとハマスの間の問題っていうのが解決されると思うので、それを抜きに今の状況の解決にはならないから、多分最初にそっちが来るんじゃないかと私は予想している。

(「BOKUDEN」)より転載

次号に続く

短歌で遊ぼう

～さわ女と「寄っといで短歌」～

○忠紀の手紙…

薬師寺で知られる西の京に、今日のぼくの慰問先、奈良医療センターがあります。近鉄西の京駅の改札を出るとすぐに、ぼくは、薬師寺の塔を見上げて、あの有名な、「行く秋の大和の国の薬師寺の塔の上なるひとひらの雲」という短歌を思い出しました。すると、目の前の、薬師寺の塔の、この景色からあの歌が生まれたのか、あの歌からこの景色がうまれたのか、どちらかわからないような気持ちになり、不思議な気がしました。そして、フッと心がゆるんで、いい、心の準備第一段階ができた気になりました。人前で演奏するなど言うことは、ぼくにとっては、とんでもないことで、何年経っても、心細く、特に、今日のように、初めての場所には、緊張します。

そんなぼくの緊張感は会場に入った瞬間、きれいに解消されました。それほど会場が、和やかで暖かい空気に包まれていたからです。今日生きてある命を飲む、とでも言うのでしょうか、そんな素晴らしく高い気に満ちた場にあわせたことは、ぼくはこれまでありませんでした。と言っても、この日、ぼくが沖縄民謡を演奏させてもらったのは、特別変わった場所ではありません。学校の教室くらいの広さの部屋に、心身障害者の人たちが、車椅子に座れないので、床に横になっておられます。一人一人に寄り添ってお母さん方がおられます。普段、離れて暮らす親子が、一緒に時を過ごす、今日は特別の日なのです。「秋の集い」と題された催しの、余興に、ぼくは呼ばれたのでした。そんな、れっきとした、部外者、闖入者に他ならないぼくが、何の違和感もなく迎え入れてもらっていたのです。それどころか、ぼくは、三線片手に沖縄民謡を歌うという、自分の立場もわすれておりました。それは言い過ぎですが、ぼくは、この場の仲間の一で、歌っているのは別の人と言ってもいいくらいの感覚でした。演奏が終わってから、一人の職員さんの気転で、みなさん一人一人、不自由な手で、三線を爪弾いて、音を鳴らしてくださいましたが、その響きが今も耳に残っています。

奈良医療センター重度身障者を今日まで知らず貧しかりけり

初めて会う重度心身障害者に豊かなものを貰って帰る

〈さわ女作短歌〉

西の京心身障害者の里訪ね慰問の吾ら励まされる午後

～投稿～

○森本さんから星野集會に参加された際に文昭さんの絵と妻の暁子さんの詩からなるポストカードを贈っていただきました。私も少しは水彩画を趣味としてやっているの、文昭さんの絵を見てとても感動しました。文昭さんの絵は色鉛筆でのデッサンによるものと思いましたがそうでしょうか。又、妻暁子さんの詩にはなぜか心をうたれたことでもあります。一日も早く星野文昭さんの再審・早期釈放を勝ち取っていただくことをねがっております。(寄せられたお手紙より)

俳句

- 1 滝風に近づきしばし止まりをり 2 夏富士の逆さに映える河口湖
- 3 罪人を奈落へ落す夜の雷 4 午後また同じ人来る日向ぼこ
- 5 罪人を 捏ねるほど色の濃くなり鶯餅

短歌

- 1 我が罪よ世間の風を背に受けて逢いに来る子の菩薩顔かな
- 2 我が獄友(とも)よ晴れて赦免なりうれど緋々に千々と雪は降りつつ

岐阜刑 M・M

○私はつい最近まで天涯孤独の無期囚でしたが、「さわさわ」や麦の会に投稿させていただけるようになってから毎日元氣一杯、充実した日々を送らせていただいております。みなさん、どんなに長い旅であっても終りのない旅はありません。その日のために、家族のために、健康第一で頑張ろうではありませんか。(お手紙より)

俳句

- 1 踊り出す雀映して水鏡 2 日溜まりにすぎななずなの手毬歌

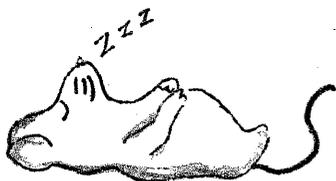
- 3 蕎麦を挽く母の背中に子守唄 4 初夢や七福連れて初詣
5 曙ぼのは兵者(つわもの)共が道印べ

短歌

- 1 春を待つ小菅の里の庵(いおり)には明日を占う君の面影
2 円山の平和を願う歌声は大地を震わせ千里を走る
3 深く散るは桜の運命(さだめ)ども千年重ねて天を突く

岐阜刑 影法師

そこそこに窮鼠だけれど猫を咬むほどでは
ないといったところか
ささやかなぜいたく白いシクラメン妻の喜
ぶ顔が見たくて



ごめんねジロー

誰も居ぬ部屋に帰れば思いがけずヒヤシンスの香り我れを迎えん

かおり女

東拘の長き廊下を訪ぬれば澄みし瞳に何故か安堵す
六十年人それぞれの人生を生きたと生かされたと思う

平良

勝利の日まで闘い抜くぞ お~みんなの力で 勝利の日まで
(高石ともやのバージョン)

○2008年が来ました。昨年は、05年の息子拓也に続いて妹順子が、母が、私たちふたりの叔母たち4人が、また同世代の友人が次々と帰らぬ人となりました。とうとうひとりの叔母の告別の翌朝、「こんな人生いやや、死んだ方が…」と起き上がれなかった瞬間、ラジオから上記の歌をジョーン・バエズが原語で歌う声を聞き、叩き起こされました。ベトナム反戦で若者たちとよく歌ったフォークソング We shall overcome で、再び生きる勇気が湧いてきました。

「神仏の愛や救いでなく、力弱く虐げられて生きる私たちが共に闘い抜く

ほか、解放はない」と信じます。新しい年は、高石ともやの「苦しいことはわかっているのさ、さあ陽気にいこう！」で生きていきます。今年もよろしくお願いします。

村田拓

(村田さんの文章は、森本が貰った寒中見舞いですが、特に頼んで、この、短歌コーナーに載せさせてもらいました。)

「寺脇三倉遺句集」より<川柳一句>

赤軍も地球の裏で年をとり(1988年)

(寺脇三倉さんは1990年、63歳で亡くなられ、遺句集は翌年、夫人の寺脇栄さんの手によって発刊されました。先日、栄さんの歌仲間である森本が、残部2冊のうち1冊をいただき、そのなかに、この、「赤軍も～」の句を発見してぜひにお願いして載せさせていただくことになりました。)

『題詠』 判決

東京高裁にて

裁かれしそのひとの名に万感の思いを込めてわれ傍聴す
ただ高く天にとどけよおのが意志右の拳にみなぎる自由
すうとした真っ直ぐに指す右の手の熱き思いに我ら応えり
退廷の命に背きて我が友はなお頑張れと声を限りに
無思想な神官に似て権力の露払いこそ審問官ぞ
ナンセンスそのほかにない判決を両の拳で握り潰せり
重すぎず軽すぎもせず量刑は妥当なりしと紙読む官吏
この星で正義を裁く茶番劇心に響かぬ判決要旨
一瞬に全てを包む笑顔あり良いお年をと響け法廷
かねてより打ち合わせせし判決のときの声なり我らが腕
伝えせし我らがサインいちどきに通いつうずる革命の声

原啓介

結果を知りつつもなお望み託し判決の朝明ける
判決を受ける君と聞く私違いは大きし刑20年
被告席を乗り越えて共に闘いたし07年秋暮れる

田川晴信

なるほどと御手にたかるる名判を聞くこともなく暮れゆく師走
さゆる夜の嵐の判にふりそめてあくる雲間につもる白雪
今さらに山にかえるなほととぎす命つないで吾れと越ゆらん

愚蓮

判決を下す判事の高位位置いつもに増して許し難かり
判決の時だけ大挙群がれるマスコミ見ればなぜか恥ずかし
判決を読みあぐ声も内容も虚無が勝利を告げているごとし
「良いお年を！」法廷中に響きたる一声ありて判決霞む
「ナンセンス」その一言は傍聴の皆の意思です裁判長殿
判決の直後友への報告に言葉途切れし数秒ありき

森本忠紀

反テロの政治の季節に裁かれしわが終章は終りにあらず
「控訴棄却」「何があっても支えます」友らの言葉をかみしめつつきく
銀杏舞う冬の青空凜と冴え護送車行く道光ふりそそぐ
いちよう舞いさざんかの咲く日に法廷へ控訴棄却は終わりにあらず
判決に小さな期待抱き来し友よ家族よ生き抜くからね
「控訴棄却」百余の燃える瞳交わし否否否と心叫びぬ
去り難き控訴棄却の法廷に不可分の心幻の旗

さわ女

〈さわ女の感想〉

「さわさわ」に寄せられた文や歌、一人一人の濃い意志、情熱、ヒューマンズムに圧倒される思いで、一気に呵成に読みました。接い独屏で、広い暖かさ、感想も何だか僭越で、書きにくい気分です。

M.Mさん…私もちょうど先輩の塩見さんが差し入れてくれた星野さんの詩画集を今年読みました。独屏で静かに読んでいると心が満たされます。懐かしさ、いとしさ、絆、豊かなヒューマンズムが、星野さんご夫婦と、周りの方々の姿として溢れてくるようです。政治的に星野さんは裁かれています。当時のリーダー的な位置にいたことを矮小化して重刑を科したことは、資料からも明らかです。早期の釈放を私も願わずにはいられません。

俳句五句のうち、私は五句目の、「捏ねるほど～」の句をとっても気に入りました。4の景色も、涼やかな湖面が浮かんでいいですね。句は評するのも難しいですけど。

短歌のは何だか自分の想いを歌われたようです。娘が世間の世風を受けつつ、いつもにこにこ合いに来てくれています。でも世風はあって「さわさわ」の友人たちや「オーブの樹」の友のように、私は恵まれていますけど、共通の思いがあります。「我が罪よ」を「おのが罪」としたら、M.Mさんの歌の流れと音に合うかなと思いました。どうでしょうか…?

2「我が獄友よ～」と、釈放された友の厳しい社会復帰

影法師さん

歌で出会い天涯孤独でなく、友情が始まるのは、嬉しい出来事ですね。俳句五句は、句合に出してもよいような添削のされた句ですよ。私は、3の「雷を挽く～」の句と、「曙のは兵者其が道印べ」が気に入りました。「道標」と書かず、「道印べ」というと、刺印された、より定命のようなものを指すのでしょうか。

2「日溜まいにすぎなすな～」も森本家の様子をきくと「和解」(拘禁者ネットワーク妻の会事務局発行)の名美子さんの文からほほえましく描いていますね。私も名美子さんの文にニッコリするのでわかります。

短歌の方も、「さわさわ」など読んだ上で、想像力を拡げて詠んでくださっているよう

ですね。

1「春を待つ～」は下の句の方がちょっと不明瞭な気がします。下も返して詠んでみます。

“めぐる春くかえしつづき出会い重ね旅の終りの言をともに”と。

2「円山の～」は大きいですね。構えが大きくてよい歌です。想像力でこんなに大きく描けるのですね。

3の、「澄く～」この歌はきって直したらもっといいものになりそうですが、私には手に余ります。上の句と下の句の関連がわかりにくいです。私も敬多彬の見事さには呆然としてしまいます。

“百計の尽きるがごとく彬散る”これは私の数少ない俳句です。今はもう不可能ですが、小菅の旧舎の2002年、窓をあけた先のみごとな彬に感動して詠んだものです。影法師さんのも、句だったのを、短歌になおしたのかな…と思いつつ読みました。

村上さんの生活がそのまま歌になっていて、思わず笑ってしまいました。韓のせいもありますけど、こんな日常の会話をそのまま一首にまるごとしてしまうのは、才能ですね。味があって、「そこそこに～」は、大いに気に入りました。何か闘う側の一人の主体性が問われると梁読みしてしまいます。「ささやかな～」これも、口語のまま、やさしさが少し照れつつ歌われているようですね。二首から、ごめんねジロ一さんという、ひょうひょうとした情愛の深い人格が、浮かびあがってくるようです。かおり女さんの歌、初短歌！やりましたね。丁度今、この文をかいていたら、かおり女さんの手紙が届きました。「『ブリーチャーを力に変えるんですよ！』と森本さんに励まされつつ生涯初の歌をつくりました」ありました。森本ファミリーに地元藤田市のお祭りの誘いを受けて、丁度行ってきて楽しかったことも書いてくれました羨ましいなあ、いつか私も！と、思っているところです。かおり女さんの文は詩が書ける人の文です。(いつも文通でそう思っていました。)今回の初一首も実感がこもっていて、いい歌ですね。できるじゃないですか！じっくり心を見つめて心を詠むといい歌がこぼれると言われたことがあります。ヒヤシンスの香りにホッとほんだ心も詠んだらどうでしょうか。きって原さんのような高速度で歌をものにする人だと思います。次

次も詠んでみてください。

平良さんの短歌の感想

面会することが自己満足ではないか、免罪符にしているのではないか、そんな幼稚な思いで煩悶していた自分がはたかしのほほ笑顔がさわやかなでした。旧友の面会は、驚き又、嬉しいものでした。昔とかわらない若さに、40年近い時間を一瞬で越ええました。69年秋に、靴線を離れていた心境を語ってくれました。何故あんなにわかれていくのか、当時自分の大学の自治会を守りたかった。そんな態度が右からも左からも批判されて、やれなくなっていったと語っていたのが印象的でした。今なら、その容赦は、理解できる共通の思いだったと思えます。その面会を経て、詠んでくださった短歌です。身にあまる、過分な喜びを詠んでくださって、①の「長き廊下に」のことばにその気持ちが伝わります。詠まれた気持ちがフィードバックされて、逆にこちらこそ心を正さねばという思いになります。②の「60年～」の思いは、面会室で、向かいあいながらの感慨、私もそう思いました。こうして再会し、歌を交流するなどとは思いもよらないことでした。当時はまなしりをけっしてばかりいましたね。これからも、あの69年文化や精神で交流しきれなかった自分を、この『さわさわ』を通して、深めたいです。ありがとうございます。

村田さんの文、we shall overcome で再び生きる勇気が湧いたとのこと。私たちもそんな一時がありました。82年、イスラエルがパノンを侵攻し、ベイリートを包囲した時です。ブラックサースデーとか、ブラックデーといわれるほどくいかえされる空爆で視界が夜のように暗黒です。外国人ボランティアの人や、アメリカからボランティアで来ていたパシチナ人や、情報交換しながら、次はこのビルが直撃くうか…と思いつつすごしたころです。ローソク一本のもとで肩をくんで、we shall overcome や、インターナショナルを、みんなであうたいました。次の合音の時には、もう殺されて、会えない人もいました。生きのびよう！闘おう！闘ってこそ勝利と信じてひくいこえで深であうたった時を思い出しました。そして、村田さんのつらい時間を想像しました。「がんばれよ！死ぬ権利なんてないんだぞ！」私も励まされた戦場のその言葉を送ります。

哀しみを勇気にかえて起きあがれ we shall overcome 今もきこえる
希望は、友情がある限り、友が居る限りそれは叶います。そんな私の奉天にバラス千
十から学んだ奉天で、二乗になっていて、人生で楽しいことさがる名人ですよ、私は。
以上、みんなと対話しつつ観想を書きながらパワーがふつふつとわいてきます。あ
りがとう！

又、川柳の、「赤軍も地球の裏で年をとれ」は、気に入りました。川柳は、頭のつかい
方が、ちがうのでは？というくらい逆説や転倒で、ギャフンといわされるものですね。
でも、私にはむずかしいです。朝日新聞の声權の川柳も好きで、よんでいますが、う
まいなあ、とうなってばかりです。みんな、うたや、心情が、つながりあうので、短歌コ
ーナーは、本当に楽しいですね。

原さんの題詠は、前回の初の短歌から、今では、私や森本さんをうならせる出来ば
えです。感性的にも心情の熱い抒情の人なのでしょうか。題詠に十一首も！一首
一首に、あの日のあの時の情景がよみがえって、胸にこみ上げる思いがあります。あ
りがとうと感謝をこめて、よみました。

どのうたも当時の一体になった法廷が迫りますが、「すうとした〜」(3句目)は、そ
う、うつつていたと、うれしくよみました。「おめし、やるな…！」の気分。私も、うたの、
刺戟をうけています。一つ一つ添削など、おこがましくてできませんが。

田川さんのうたは、前回も、又、今回も「字余りの味」でした。とっても味わいがあ
って、歌にアジテーションがあります。被告席と傍聴席の柵をとばらうって、闘いたい
気分でした。そんな私の思いと共通しています。いいたいことがしっかり出ていて、こ
れをリズムカハにデフォルメさせたらすごい歌人に変身しそうですね。

憲彦さんの題詠です。言葉を白わせる調べに、旧知の憲彦さんの若い時代からは
思いがけず、うなっています。ドキッしました。①は端座したような音に、それでも
内には、心に燃える思いを感じさせるうたです。②は、古(いにし)えの歌と同調して、
意味を深く、とれるようですが、私では深く解説しきれませんが、“苦しみのあとに并

証結的な発展が有り！”と言いたいのかも、と深読みしています。③は、さわさわの
歌ですね。何か、格調たかそうで、それでいて、格調より友情の楽しみの三首だった
ように思います。これからも格調と友情の調べをおねがひします！

さて、忠紀さんの題詠です。この歌も、情景が、ぐっと明示されて、臨場感をよく詠
み込んでいますね。全体に感情の怒りがおさえきれず、まだホットな感じですよ。

・判決を下す判事の高位位置いつにも増して許しがたかり

これは、明確で迫力のある意志がこめられていますね。下の句が、情景が、いいの
ですが、もう少し工夫することばがないか…と考えたけど、みつかりません。これ以
上の添削はしり！すべて、熱い忠紀さんのまっすぐな心情がこぼれるうたですが、
一番好きなのは

・判決の直後友への報告に言葉途切れし数秒ありき

その時の、音が、そのまま、目の前にうかんで、当日の同じ法廷の空気の中で、みな
一体でいきとあった一瞬をまさまさと思い出させます。その思いのままです。きっと、
前一首の「ナンセンス」と叫んで退庭させられた友に伝えようとして怒りで、もつ
れる思いと切迫感が伝わる一首です。

“数秒ありき”が、とても生きていますね。

「よいお年を！」のうたも「ナンセンス」も、その思いのままに気に入っています。忠
紀さんのうたは、怒りと抗議で、何だか踊りだしたい気分がさせられますよ。

以上、みんなと対話しつつ観想を書きながらパワーがふつふつとわいてきます。あ
りがとう！

次号(4号)題詠は、「核と人類は共存できない」です。

米澤さんが文章を寄せてくださいましたので、その文章から生まれてくる歌を
詠んでくださるもよし、ヒロシマ、原爆、をテーマに、思い思いの歌を詠んで
いただくもよし。題詠への奮ってのご参加お待ちしております。(編集部)

原爆を使った国は一つだけ

サミットをやるならヒロシマ・ナガサキで

ブッシュ・全資料館を見よヒロシマの

米澤鐵志

核と人類は共存できない

米澤鐵志

私は1945年小学校5年生の時に広島で爆心から750メートルの場所で原子爆弾の洗礼を受け、母を喪い、自身も頭髮が全部抜け、40度以上の高熱が2週間以上続いたが、色々偶然が重なり奇跡的に生き残った。

被爆直後から疎開先まで逃げ帰った一日の経験は、まさに地獄絵図で今でも私の臉の底から消え去ることはない。

避難する途中で見た光景は、最初が前を逃げている婦人の背中の中のシャツが燃えているのに自分の髪に燃え移るまで気がつかない。同じく背中に大きなガラスが刺さり、血が腰のほうに垂れているのに逃げるのが必死で気づかない。黒焦げになった赤子を抱いて自身の髪の毛を逆立たせ防火用水の中で息絶えている人。火に追われ倒れた家屋の下敷きになった身内を見捨てて泣きながら逃げる人全身大火傷で川の水を求めてショック死をし流されていく人。鼓膜が破れ耳から血を流している人。戸外で建物疎開の作業をしていた中・女学生は衣類が4・5千度の光線に焼かれほとんど裸で、焼かれたシャツの袖の位置から皮膚が垂れ下がり、爪の先で止まりその皮膚が体に当たらぬよう手を前に出しまさに幽霊のようにさまよっていた。

戦後まもなく広島で丸木位里、俊夫妻の初めての「原爆の図」を見たとき、多くの人は感動したが、実際に体験した被爆者はもう一つピンと来なかった。それはあの呻き、想像を絶する強烈な爆風圧、爆発音、4・5千度の光線、そして死臭と焼けた体の焦げくさい臭い、これらはやはり筆舌には尽くし難い。それでも私はあの体験の実態を少しでもリアルに表現しながら、体験講話を行っている。

そして特に戦争を知らない人に、いま忘れ去ろうとしている戦争と原爆を引き起こした日本の加害の歴史を語っている。特に二重三重の被害を受けた朝鮮人被爆者とアジアの民衆に与えた加害の歴史を必ず語っている、これが「生かされた私」の義務だと思っている。

私とピカドン

田川晴信

小学校5年の頃、母に連れられ、2時間汽車に乗り、広島市内に伯母さんを訪ねた。当時、瀬戸内を走る呉線は、D51（デゴイチ）の蒸気機関車が走っていた。

駅前のトタン屋根の闇市マーケットで、叔母さんは、当時、珍しい茶髪西、パーマをかけ“端切れ”を売っていた。

伯父さんは、戦死、母の兄だった。連れて行ってもらった食堂で親子丼を初めて食べた。こんな美味しいものが、世の中にあるのかと。家は、大田川の河川敷。朝の洗顔には、大田川の水を汲んだ。長男は勝さんという陽気で、笑顔の素敵な兄貴だった。好きな女性が居たが、一緒に暮らそうとはしなかった。何年か過ぎた彼は原爆病(白血病)で死んでった。長女は爆風で、下敷きに、後遺症で、足を引きずりながらも、快活に動き廻って、次男、三男は無口で、中学を出て大きなアルミの弁当箱を持って朝早くから働きに行っていた。ケンカには、強そうだった。

高校の2階の窓から目の前に見える大久野島は、戦前、アジアの人々を殺す毒ガスの秘密工場だったと恵海高校に入学し、初めて知った。戦前の日本地図からは、消されていた島だった。権力は、平気で、存在しているものも自分たちの都合で、抹消してしまう。

みんな、みんな生きていく権利を持っていると想いたい。それを保障出来ない国は、作り変えなければ、と。

塀を越えて、歌声を届けよう

贈ります、この一曲

(3) 差別裁判をうちくたこう

私の愛読書の一つに「橋のない川」(住井すえ)があります。熱心に読むよ

た。出て来る自然の景色や、生活の風景、言葉から道や家々のたたずまい、これこそ、我が地元、大和の郷土の文学と呼ぶにふさわしいと、大和高田で「橋のない川」読書会をよびかけています。まだ会員は一人もできていませんが。

「橋のない川」を読むと、被差別部落にどのようにして誕生したか、なぜ水兵社が生まれなければならなかったか、よくわかります。差別というものが、部落の人々からどれほど人間としての生を奪って行ったか、その中で部落の人々がどのようにして、人間としての生を取り戻し生きようとしたか、いきいきと描かれています。

それと同じように、部落外の人たちは、差別することで、どれほど人間性を歪め、損なって行ったことか、これもまざまざと描かれています。こちらの方は、現在に到るまで、改まることなく、むしろ、ますます状態が悪化しているということは、私実感しているところです。

重い現実打ちひしがれて、様々な面で私たちは奴隷状態に落とし込まれています。そのことが私たちをどうしようもなく差別へと向かわせ、往々にして、その事に気づかせはしません。大和高田で暮らす日々、私は、自分の自由をなかなか実感することができません。

自由がない重苦しさを感ずる度、ああ、私たちにも「水平社」がほしいと願ってしまいます。自らの奴隷性を打ち壊して、解放を目指し闘う拠点があるほしいものだと思ってしまう

「解放闘争とは文化闘争だ」と言ったのは村田拓さんです。1980年代、私は「民衆」という名の。文化総合誌を出すグループに属していて、リーダーの村田拓さんの尻にくっついて、部落解放運動の集会やイベントによく参加しました。その頃、グループでは、世界各地の民族解放運動や民主化闘争の中から生まれた歌を覚えて、みんなでよく歌いました。そんな歌の中で一番よく歌った歌の一つが、この「差別裁判うちくだこう」です。この歌を口ずさむと、狭山闘争から盛んに鼓舞されたあの頃を思い出します。

今、現在、私が暮らす大和高田で、私は解放の力の字も口にできていま

せん。そんな私が自らと、この同じ時代を生きる人たちの解放を訴えることができるのは、いつの日のことでしょうか。この「差別裁判うちくだこう」を歌うと、その日が必ず来ると信じていることができる気がします。

(森本忠紀)

差別裁判うちくだこう

詩・曲=作田晃/1970年国民大行動隊

Em

1. に し か ら ひ が し に む
 2. さ や ま さ ー べ ー つ の さ
 3. わ が こ う ど う た い む

Am B7 Em

じ つ を さ け び び 旗 の
 い ー ぼ ん ー を だ ん こ ー わ れ
 じ つ を さ け び さん びゃ く ま ー

Em Am B7 Em

も と わ れ ら は す す む さ ー
 ら は た た ー か わ ー ん し
 ん の ま う ー だ い ー と さ ー

Em Am B7 Em B7

べ つ さ い ぼ ん う ち く だ こ う さ ー
 か わ せ い ね ん と り も ど そ う し
 べ つ さ い ぼ ん う ち く だ こ う さ ー

Em Am B7 Em B7 Em

べ つ さ い ぼ ん う ち く だ こ う
 か わ せ い ね ん と り も ど そ う
 べ つ さ い ぼ ん う ち く だ こ う

編集後記…戦前、治安維持法治下、人々はどのように生きたのか、当時を回想する一女性の手記をたまたま読む機会に恵まれた。父が胸苦しさを訴え、心不全との診断で、緊急入院した。その病院備え付けの図書コーナーの本棚でたまたま手にした「素手の女」という本がそれで、「治安維持法の時代を生きる」という副タイトルがついている。著者は信多まちという方で、信多さんは長寿でお元気、80歳を過ぎてから60年前を回想して書かれた。私は序文にある、「若き日に打たれし尻はしびれおり天皇制とはおぞましきかな」という短歌にまず引きつけられた。若い共産党員活動家として信多さんは何度も捕らえられ、当時の特高警察により文字通り、殴る、蹴る、の、凄まじい暴行にさらされるが、意気軒昂、挫けることないのはもちろん、私が感動したのは、治安維持法をきっぱり、批判していることだ。「社会に対して悪いことは何もしていません。悪いのはこの治安維持法という法律です。自分たちの闘いは社会の進歩、発展に沿ったもので、現在の不合理を改めることです。婦人の地位の低いこと、労働者、農民の生活が圧迫されていることを改めることです。そして、今戦争へとすべてを誘発しているのを見ていられない。」と、信多さんは裁判ではっきり述べておられる。

父も90歳と長寿で、脳梗塞で半身不随ながら陽気で元気だ。針を刺して肺の水を抜いてもらってから、それまでハーハーと、苦しうだった呼吸がかなり治まった。日頃、100歳まで生きると言っている、その言葉通りの闘病の時を刻みつつ、父は日を送っている。/昨年12月20日、控訴審で、重信房子さんは、控訴棄却、原審通り、20年の刑の判決が下された。現在上告中だが、司法というもの、その反動化のひどさというものは、戦前の治安維持法の時代と変わらないと私は思っている。国が戦争政策を推進する時、司法は反対する者を叩きつぶしてその地ならしをする役割を果たす。その点が、現在は、戦前に酷似している。そんな私には、信多さんと、重信さん、二つの像がダブって見える。私は今思う。戦前、治安維持法治下、当時の人々は信多さんたち獄中の人たちとどのようにして一緒に生きたのだろうか、あるいは、生きようとしたのだろうか、と。/次号第4号は6月刊行の予定です。重信さんへのお便り、投稿等、お待ちしております。5月中に送っていただきますようお願いいたします。(森本)

販売は1冊300円です。なるべく年間購読をお願いします。送料込みで、年会費は2000円です。

(郵便振替口座 00920-2-169764 さわさわの会)

連絡先 一六三五-0061 大和高田市磯野東町3-27 森本忠紀

Tel/Fax 0745-22-4002 mail:toppinsyan@kpa.biglobe.ne.jp